

---

# 赤い夜

大野さいころ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤い夜

### 【Nコード】

N3704BA

### 【作者名】

大野さいころ

### 【あらすじ】

原因不明、生存者無し。誰も何もわからない事件が起きてから約10年の月日が流れ、人々は平和に暮らしていた。大都市オルガルドでは年一回の『武闘会』開催を目前に控え、いつも以上の活気が溢れていた。これは、武闘会に参加するためにオルガルドに来た少女たちと、少し怠惰な青年が会うことから始まる、真実探しの物語である。「空に青がある限り、絶えず炎は燃えるだろう。空が赤く染まるとき、多くの炎は消えるだろう」

## プロローグ（前書き）

閲覧ありがとうございます。

## プロローグ

何度思い出したことだろう。

何もできなかった自分を。

命が塵のごとく消えていく光景を。

決して忘れることも、清算することも許されないが

取り返すことも叶わない。

後悔することしかできない過去を。

何度考えたことだろう。

なぜ俺が生きているのかと。

なぜ俺だけ死んでないのかと。

何度欲したことだろう。

金、権力、地位、名誉、女。

そのどれでもなく純粹な力を。

ただただ圧倒的な力を。

何度願ったことだろう。

あの夜が二度と繰り返されないようにと。

## ブローグ（後書き）

今回はブローグなので短いです。

## # 1 勧誘（前書き）

閲覧ありがとうございます。  
ここから物語の始まりです。

## # 1 勧誘

「ようこそ大都市オルガルドへ！通行証を拝見いたします」

門番にそう言われ青年はガサゴソと荷物の中を探す。

中々見つからず時間だけが過ぎていき、やがて門番も不振な顔になる。

が、やっと見つかった通行証を見せたおかげで門番の顔が戻る。

「グラント・カツシユ様ですね？確認しました。通行証はなるべく取り出しやすい場所に入れておいたほうがいいですよ」

と、門番からの承認と小言を受け取り、荷物をまとめてると再度声をかけられる。

「観光ですか？」

「いや、ここを拠点にあちこち旅してるんでね」

「ギルドには所属しているんですか？」

「フリーで楽しんでるよ」

二言くらい会話して、グラントと呼ばれた男はようやく歩を進める。久しぶりに帰ってきたこの街は、以前よりも活気だっているようだ。った。

俺は久々に帰ってきた街を眺める。  
なんか以前いた時よりも賑やかになったな〜と不思議に思ったが、  
ふと目に入った看板を見て納得した。  
いつの間にか今年もそんな時期になったのか。

### 『武闘会』

その名の通り戦って勝者を決める大会。

この大都市オルガルドでは毎年恒例行事として有名だ。  
魔法・武術なんでもござれの大会で、興味本位で参加するとひどい  
目にあうこと間違いなし。

そして参加者もかなり多く、他国からも毎年多くの強者が参加する  
ためにやってくるとか。

実際に、各国の騎士や歴戦のギルド所属者の参加記録もある。  
参加人数などおそらく大陸でも屈指の多さになるだろう。

まあ俺はどうせ今年も参加しないだろうから関係ないけど。

ちよつとは興味もあるし優勝商品の10金貨は魅力的だが、どうに  
もやる気が出ないしめんどくさい。

何より、大会唯一といっていいルールの存在で俺の参加はできない  
のだ。

・武闘会参加者は、『4人』で一組のチームを作ってエントリーす  
ること。

これが唯一といってもいいルールだ。

俺はこれのせいで参加することができない。

…別に友達とか知り合いがないわけじゃないぞ？

いやホントに！むしろ知り合いとかは多い部類に入るんじゃないだろうかとすら思う。

しかし、その知り合いとかは旅先で寄った街などに多いから毎回武闘会には参加できない。

この街にもいるっちゃいるけどあいつらは戦えないしなあ…。

何よりあいつらを含めても3人だから結局参加できないし。

( )

(ん？多分今年も参加しないと思うぞ？)

( )

(わかったわかった。もし万が一出るようなことがあれば戦ってもらうから)

俺が使役している精霊が話しかけてきた。

念話という方法で、精霊と頭の中で会話できる。

しかしこれは上位の精霊のみしかできずにいるので意外と知らない人間も多い。

まあそんなことはいいとして、何でも戦いたいから武闘会に出るなら召喚しろと言ってきた。

何でそんな好戦的なんだろうかと嘆きつつ、適当にあしらっておいなので今回は大丈夫だろうと思う。

なんせコイツを人前で召喚すると騒ぎになるからなあ。

「あゝ疲れたつと」

ベンチを見つけたので荷物を降ろし、ガタつと音をたてて座り込む。門からいつも世話になってる宿まではだいぶ距離があるから小休止だ。

今回もちよつとの期間休憩してから出発しよう。

そう決めて、ここ数年はいつもそうしてるかと苦笑する。

ギルドでも入ってみるかなあと考えながら空を見上げると、雲一つない青空が広がっている。

まるでこの世に争いごとがないと錯覚させるような、綺麗な空だった。

「平和だなあ……」

思わず口からこぼれた言葉だった。

私たちは困っていた。

武闘会に参加するために大都市オルガルドまで来たっていうのに、ルールのせいで参加資格が得られない。

なんで3人じゃいけないのよ！？って思うし、実際に受付の女性にも言ってみたが「ルールですから」の一言でねじ伏せられた。

なんて融通が利かないのかしら！3人でも4人でもそんなに変わらないでしょ！

実際は3人と4人じゃ大きな違いはあるが、

私たち3人でいいところまでいける自信がある。  
むしろ一人だけ知らない人間がいても邪魔になるだけだろう。  
私はどうしたものかと思い、隣にいる金髪の女の子に話しかけた。

「ねえシア？どうする？」

「そうですね…。私たちだけじゃ出場できないですものね」

「なんかいい案ない？」

「やはり誰かに一時的にチームに入って頂くしか…」

やはり私と同じ結論になり、なんかしっくりこない様子の子のこの女の子はシア。

フルネームはセルシア・セルヴィガー。魔法が得意だが運動神経はあんまりない。

貴族ということもあって言葉遣いが丁寧で、ちょっとだけプライドも高い。

そして容姿も抜群に綺麗で、胸もでかい。…なんかずるくない？  
ま、まあ私もそれなりに容姿に自信あるし（シアほどではない）、  
胸もそこそこでかいし（シアほどではない）…。

……………。

これ以上比べると精神的に病みそうだからやめておこう。

自分の気分を変えるために、シアとは逆隣にいるかわいらしい女の子に話しかける。

「ラビリアはどう？」

「わたしも誰かに入ってもらうしかないかと…」

「そうよねえ。気はあんまり進まないけど」

「け、けど！怖そうな人はいやです…。」

なんかすでに泣きそうなこの子はラビリア・ジョンストン。背は小さくてとてもかわいらしい。

性格も恥ずかしがりでまさに女の子っぽさが滲み出てる。

年は私たちよりも2つ下で、まるで妹みたいに思わせる雰囲気がある。

ラビリアも魔法が得意で、主に回復などを専門としている。彼女の性格にピツタリだと思う。

「ミリーはどうなんですの？」

「私？私も適当に誰か入れるしかないかなあと思うよ」

「こ、怖くなさそうで、出来たら優しそうな人がいいです…」

「わかってるわかってる」

ラビリアに苦笑しつつ、それしかないよねえと嘆息する。

シアにミリーと呼ばれた私はミリエール・マックギル。

魔法はあんまり上手ではないけど、剣術なら自信がある。

親しい人にはミリーと呼ばれていて、1年前からこの3人で一緒に旅をしている。

ちなみに大都市オルガルドには今回初めてきて、これからはここを拠点に活動するつもりだ。

「それにしてもねえ」

「どうしたんですの？」

「うん、どうやって入れる人を探そうかと思ってね」

「そうですね。例えば暇そうにっていて、ラビリアの要望に叶っていればその人でいいと思いますけど」

「そんな簡単に決めちゃってもいいかな？」

「ええ。最初は3人で参加する予定でしたから、3人で戦えばいいのですわ」

「それもそうね。ラビリアはどう思う？」

「わたしもそれでいいですけど、そんな人中々いなさそうです…」

「確かにそうですね。けど案外近くにいたりして」

「ないない！そんな簡単に見つかるわけないって」

方針は決まったものの、そんな都合のいい人がすぐ見つかるはずもなく嘆息する。

と、近くからガタッと音がして

「平和だなあ…」

と気の抜ける声が耳に入り、思わず声が聞こえた方向を見てしまった。

そこには明らかに暇そうで、私たちに年齢も近そうな青年がベンチに座って空を見上げていた。

「いたんじゃない…?」

私がそういうと、2人もコクコクと頷く。

ベンチにもたれかかっているその青年は私たちに気づいてないのか、ずっと空を見上げたまま動かない。

とりあえず暇そうという第一条件はクリアしている。

「ラビリアはどう?あいつでも大丈夫?」

「は、はい。怖くはないです」

「たしかに雰囲気は柔らかいものがありますわね」

ラビリア、シア共に誘うのはあいつでもいいようだ。かくいう私も特に嫌な点もない。

「とりあえず声かけてみよっか。シアお願いね」

「わたくしですか?」

「うん。よろしくね!」

シアは貴族なので、対人スキルなども高かったりする。

それに見た目もいいので男相手ならばこれ以上の人材はいないだろう。

シアが「わかりましたわ」と言ってくれたので、私たち3人はあの男を誘うべく歩き出した。

ベンチに座ってぼーっとしていたら、少し離れたところに3人の女の子がいるのに気づいた。

パツと見年齢は俺と同じくらいなのに、帯剣している子がいるのを見ると武闘会が目当てだろうと勘付く。

帯剣していない2人からは魔力が感じられる。

魔法を発動していないのにも関わらず微量だが魔力を感じるということは、それなりの強さがあるのだろう。

しかし珍しいなあ。

武闘会に参加する女性も珍しいが、何よりチーム全員が女性というのが珍しい。

今は3人しか見えないが、きっともう一人も女性なんじゃないか？などと勝手な推測を1人でしていたら、なぜか3人組がこっちに近づいてきた。

まさか俺に用なんてあるはずもないだろうから、先ほどまでと同じく空を眺めていようとしたら、

「すみません。少し話を聞いてもらってもいいですか？」

と先頭にいた金髪の美人さんに話しかけられた。

完全に不意をつかれたので、咄嗟の言葉がでなかった。

ただただ金髪の美人さんを凝視していたら再度声をかけられたので今度はちゃんと返事をする。

「ああ、ごめんごめん。でも初対面だよね？」

「ええ、そうですわ」

だよねえ。まったく見覚えないし。

「それで、俺にいったい何の話かな？」

「その前に質問させて頂いてもよろしいですか？」

この子たちは俺に何の用があるのだろうか？  
まったく見当もつかない。

「いいよ。何かな？」

「これからしばらくの間お時間空いているでしょうか？」

「ん〜それってどれくらいの期間のこと言ってる？」

「一週間程度ですわ」

…なるほど。

これから一週間後っていうとちょうど武闘会が終わるところか。  
受付もたしか今日までだったか？

ある程度内容が把握できたが、まだちゃんと3人の話を聞くまでは  
確証は持てないか。

「まあひと月くらいは暇だな。それがどうかしたか？」

俺がそう返事をする、3人で目配せをして頷いている。

そして俺の予想通りの返答が返ってきた。

「よろしければ、私たちとチームを組んで武闘会に参加して頂けませんか？」

「……」

やっぱりか。

どうしたもんかと困っていると、今度は違う女の子が前に出てきた。

「参加してくれるだけでいいのよ。戦闘は私たちだけで大丈夫だから」

「なるほどね。人数合わせてことでいいのかな？」

「そうよ。だからお願い！もし優勝したら分け前もちゃんとあげるから！」

確かにそれなら俺にも断る理由はないかな？

戦闘しなくてもいいならあいつも召喚しないで済むし。

何より一番小さい女の子がこちらを涙目で見てるのが気になるし。断ったら泣くんじゃないか？

「あ、あの…お願いします…」

蚊の鳴くような声でお願いされてしまった。

悪い条件でもないし、泣かせたくもないからまあ参加してみるか。

「ああ、いいぞ」

「「「え!?!」」」

なぜか3人同時に驚かれた。

「誘ってきたのはそっちじゃないか。なんで驚くんだ?」

「え、だってエントリーだけしてもらって戦わなくていいなんて条件、こっちに都合良すぎるからそんな簡単にOK貰えると思わなかったのよ」

「ああそんなことが。まあ断るほどの悪条件じゃないし、俺の暇つぶし程度だと思ってくれていいよ」

「そう?ありがと!あ、私はミリエール・マックギル。ミリーって呼んで」

そう名乗った女の子は帯剣している。

剣術が得意なのだろう。華奢な体だが筋肉の付き方を見ると武術もできそうだ。

「わたくしはセルシア・セルヴィガーといいます。シアと呼んでください」

次は最初に話かけてきた金髪の美人さんが自己紹介してくれた。シアは魔力は高そうだが、武術などはきつとできないだろう。

「わ、わたしはラビリア・ジョンストンです…」

さっきの泣きそうな女の子は消えそうな声で自己紹介してくれた。この子からも魔力を感じるが攻撃とかできるのだろうか?

しかしこの3人は剣士と魔術師のバランスがいいな。  
きっとシアとラビリアのうちどちらかが治癒魔法を使えるのだろう。  
まあ十中八九ラビリアの方だとは思っけど。性格的に。

「俺はグラント・カツシュだ。親しいものはグランと呼ぶな。まあ  
呼び方は自由でいいや」

「よろしくね、グラン」

「よろしくお願ひしますわ、グラン様」

「よ、よろしくお願ひします、グラントさん…／＼／＼」

なぜかラビリアは照れていたが、とりあえずは相手の簡単な情報を  
掴めたのでそろそろ次の提案をする。

「よろしくな。じゃ、さっそく受付いこうぜ」

俺はさっそく歩き出す。

が、数歩歩いたところで誰かに肩を掴まれた。

「ん？なんだ？」

「受付、あっちなんだけど？」

振り向くとミリーが呆れ顔でそう言った。

ついさっきあった子にそんな顔されるとは、なんかショックだ。

「オルガルドに来るのは初めてなんですの？」

シアにそう聞かれ、これ答えるとまた呆れられそうだなと思ったが正直に答える。

「いや、もう数年ここ拠点にしてるんだけどね…」

「武闘会って、毎年開催されてるのに…」

シアはともかく、ラビリアにも呆れられてる様子。

このままじゃいけないと思い、咄嗟に言い訳を始める。

「だってなあ…。一回も参加したことなんてなかったし受付の場所なんて知ってるはずないだろ？なにより」

「はいはい、わかったからいきましょ」

ミリーに遮られ、背中を押される。

なんかあって間もないのに嫌な立ち位置になったなあ…。

まあ変に気を遣わなくていいのは助かるけど。

どうせ一週間程度の付き合いだしな。

それなりにうまくやっていこう。

そう思い直して、自分の足で歩を進め始めた。

## #2 偶然重なる過去（前書き）

閲覧ありがとうございます。

## #2 偶然重なる過去

どうせやることもないだろうと思いつ、武闘会に参加することになった。

初めて参加するが、なんかもうめんどくさくなってきたな。

受付に行くだけだったのに既に人が多すぎるほどいる。

これ、全員参加者だったら一週間では終わらないんじゃないか？

…勧誘、受けなきゃよかったかな？

既に軽く後悔してるが、まあ戦わなくて済むならいいか。

受付までまだ距離があるらしいので、道中俺は気になっていたことを聞いてみる。

「そついや女の子3人って珍しいと思うんだが、お前たちはどういう関係なんだ？」

しかも3人ともまだ若いしな。

俺よりも年下か、同い年ってところか？

「私たちはもともと知り合いでもなんでもないのよ」

「そうなんです。たまたま知りあって一緒に行動するようになったんですわ」

「ふーん…」

なるほどな。

それじゃあそれぞれが親元を離れて旅してる理由があるってことかな。

「どのくらい一緒に行動してるんだ？」

「ちょうど1年くらいよ」

「ほー…」

1年経ってるってことは仲間として相性もいいのかもな。

なんせ下手したら一緒に行動して数日で解散なんてこともざらにあるらしいし。

戦闘での役割や、性格がうまく合わないと一緒にいる意味なんてないしな。

まあ俺は基本一人だからわかんないけど。

( )

(大丈夫だ。お前らの事忘れてるわけじゃないよ)

「ちょっとグラン？」

「ん？」

「ん？じゃないわよ。なんか急に黙ったら気になるじゃん」

「ああ、悪いな」

念話をするのと外の会話が入ってこないからつい黙ってしまった。これよく言われるんだよなあ…。

「話しは戻るけど、聞く限り特別な仲間ってわけじゃないのか？」

「出会いこそたまたまだったけど、今は特別な仲間だと思っているわ」

「私ですわ」

「私です…。ホントに出会えて良かったです…」

…良い仲間だな。

3人が3人ともお互いに必要としているのがよくわかる。親友の様な仲の良さがうかがえる。

「親友か…」

「え？」

聞こえない程度に呟いたつもりだったが、どうやらミリーには聞かれたらしい。

あまり突っ込んでほしくない部分なので「なんでもないよ」と返しておいた。

…それにしても親友か。

その単語を聞くたび、思い出すたびに様々な感情がうずめく。

懐かしさ、怒り、悲しみ、嬉しさ、憎しみ、慈しみ…。

あいつらのことを考えれば考えるほど強くなるこれらの感情を俺はいつも持て余している。

そのことを自覚しながらも、どうすればいいのかがいつもわからない。

いつか、わかる日がくるのだろうか？

それすらわからない。

ただ一つ、一つだけ明確にするべきことは理解している。

俺があいつらにしてやれる、最後の事。  
必ず探し出し、必ず殺すこと。  
それだけは昔から変わらずわかっている。

「ちょ、ちょっとグラン？」

「あ？ああ、なんだ？」

「また黙ってるんだけど。しかもなんか怖い顔してたし…」

しまったなあ。ついこいつらがいるのも忘れ考え耽っていたようだ。  
ラビリアなんか本気で怯えているようにみえるし。  
しかし…そんなに怖いかな、顔…。

「すまんすまん。ちょっと考え事してただけだから気にしないでくれ」

「ならいいけど…。今度はグランの事教えてよ」

「俺の事？」

「少しとはいえ一緒に行動するんだしいいでしょう？それにさっきは  
私たちの事聞いてきたんだし」

「私も聞きたいですわ」

「わ、わたしもです…」

「そつだな。なんでも聞いてくれ」

とは言ったものの、言えないことの方が多いんだよなあ…。  
まあ適当に濁せばいいか。

「じゃあ年齢は？」

「19だ」

「ふーん。私よりも1歳年上なんだー」

「そうなのか？それじゃシアもミリーと同じ18歳かな？」

「当たり前ですわ」

「で、ラビリアは16歳くらいか？」

「す、すごいです…。その通りです…」

適当に言っただが当たったようだ。

まあ大体みんな予想通りの年齢だったな。

唯一年下のラビリアも、なるほど、妹的な立ち位置にいるわけか。

「普段は何をなさっているんですか？」

「特に何も。ここを拠点に旅をしてるくらいかな。適当にどっか行って適当に帰ってくる。そんでひと月くらいしたらまた行くって感じ」

「ギルドには入ってないんですの？」

「それなー。何度か考えたことあるんだがまだ入ってはないんだな」

「なんか随分適當ねー」

一応、勧誘してくる奴もいるんだがどうにもな。  
まあ暇な時一度顔出してみるのもいいかもしれんな。

「け、けどその旅って何か目的とかあるんですか…?」

「それは秘密だ」

「あう…」

これは軽々教えられることじゃないからな。  
知ってるやつはそれこそ数人しかいない。  
皆、長い付き合いの奴だけだ。

「旅してるってことはそれなりに戦えるの?」

「それも秘密だ」

「魔法はつかえるんですの?」

「秘密だ」

「あの…お金はどうしてるんですか?」

「秘密」

「ちょっと!なんでも聞いてくれってさっき言ったじゃない!…」

「なんでも答えるとは言っていないぞ？」

「確かに言ってますでしたわ」

「シアも納得しないの！そもそも秘密にする必要もないでしょ？」

嘘を言つて適当に納得させてもいいんだが、万が一ばれた時のことを考えると得策じゃない気がするんだよな。  
まあ戦わないって約束だったしばれることはないだろうが。

「まあ気にすんな。大体知ったところで特に意味もないだろ？」

「それは…そうだけど。うーなんか納得いかない！」

「あんましカリカリすんなよ。ほら、もう受付見えてきたぞ？」

結構話してたのか、いつの間にか受付前まで来ていた。

それにしても…人が多いな。

これ明らかに参加者だよな？

さすが大都市だけあって武闘会の知名度も伊達じゃないってことか。  
ラビリアも人の多さに圧倒されてるのか、小動物のように震えている。

「ラビリア、大丈夫か？」

ポンッとラビリアの頭に手を乗せて言ったところ、恥ずかしがってしまった。

非常にかわいらしい。

なんて馬鹿なことを考えてるうちに、俺たちの前のチームが受付を終わったみたいで

「はい次の方どうぞ」と受付の女性に促された。

「参加登録お願いします」

「はい。では代表者の方のサインをお願いします」

そんなのが必要なんだな。

この3人のうち、リーダーシップをとってるのは今までの会話からするとミリーだな。

とすると代表者もミリーか？

「グラン、お願いできる？」

と思ったら俺が指名された。  
なぜ？

「えーと、なぜ俺？」

「私たち女性だからあんまり公に名前公開されるのはちょっとね」

「いや、どっちにしる試合になれば紹介されるんじゃないか？」

「そうだけど、代表者ほどじゃないでしょ？」

理由は納得できた。

が、俺もあんまり名前を知られるのは好ましくないんだがなあ…。  
けどまあ、まさか決勝までいくわけでもないだろうし大丈夫か…？

「…そんぐらいはさせてもらうか」

「ではこちらにサインお願いします」

「これでいいか？」

「はい。グラント・カッシュ様ですね。武闘会頑張ってください」

「どうも」

「こちらがグラント様たちが最初に試合する相手です」

と、一つの名前を見せられたが全く知らない名前だった。

ミリーたちも知らないらしく首をひねっている。

名前だけ一応覚えておくか。

「わかった、ありがとう」

「いえ。それでは武闘会は明日からです。一試合が終わりすぐに次の試合が始まるためスケジュールが存在しません。なのでできれば闘技場の近くで待機しててください」

「了解、じゃ行くか」

「ご武運をお祈りしています」

受付女性の声を背に受け、俺たちは移動を開始した。

「代表になってくれてありがとう」

「戦わない代表ってのもおかしい話しただけだな」

「ふふっ確かにそうですね」

「だろ?...さて、俺はそろそろ帰るわ」

今日はもう一緒にいてもやることはないだろうから、  
そういつて別れようと思ったのだが

「グラン様はどちらで寝泊まりしているのですか？」

と聞かれ、立ち止った。

「知り合いに小さい宿をやってるやつがいてな。そこで世話にな  
てるよ」

「そこ、私たちにも紹介してくれない？」

「お、お願いします...」

そういえば、さっき着いたばっかとか言ってたっけな。

「まあいいけど。別にたいしていいところでもないぞ?」

「構いませんわ」

「そうか、じゃあついてきてくれ」

そういつて先頭を歩き始める。

お互い聞きたいことも聞いたから会話もない。

なんか話した方がいいかどうかを考えていたところ袖を引っ張られ  
る感じがしたので、

誰が確認しようとしたと斜め後ろを振り向き、多少の驚きを受けた。

それがラビリアだったからだ。

俺はラビリアにはここまで一緒にいて、知らない人物、特に男には怯えてる印象を受けていた。

そんな彼女が自ら話しかけてきたのだから、そりゃあ驚きもする。ちなみにミリーとシアはなにか談笑していて気付いていないみたいだ。

「どうした？」

できるだけ優しい声で聞く。

「あの…間違ってたらごめんなさい…。グラントさんってもしかして…とても強いんじゃないかと思って…」

「……………」

これはホントに驚くな。

ラビリアには驚かされてばかりだ。

「へ、へんなこと言ってますん…！」

俺が黙っていたせいか、速攻で謝るラビリア。それだけでちょっと罪悪感を感じる。

「いや、大丈夫だ。ごめんな」

「…、こちらこそ…。それで、その…」

「ああ、なんでそう思ったんだ？」

「あの…信じてもらえないかもしれないですけど…私、人のオーラみたいなのが見えるんです。けど…それは、強い人からしか見えません…だから、あの…」

やはりか。まあ見ただけで人の強弱がわかる時点でこの可能性しかなかったわけだが、

それでも十分に驚嘆することをラビリアは言っていた。

「やっぱり…信じてもらえないですよ…。前、ミリーさんとシアさんにも言っただんですけど…。気のせいだって言われて…」

「ラビリア、それは気のせいじゃないよ」

「え…？」

「君は紛れもなく人のオーラ、正確には魔力量を視ることが出来る」  
「いる」

信じられないといった表情で固まるラビリア。

まあ、こんなことが出来るなんて普通は知らないからな。

知る人ぞ知る、というか出来る人だけ知っているといった知識だし。

「え…あの？グラントさん？」

「ラビリアがオーラと言っていたのは、その人のおよその魔力量だ。数値化されてるわけじゃないから結構アバウトなんだがな。で、強い人からしか視えないってのもあながち間違っていないよ。魔力量が多い人間は、比例して魔法も強くなる傾向があるからな」

「もしかして…グラントさんも視えるんですか？」

「まあね。ちなみにこれは頑張ればできるって芸当じゃない。君自身の才能だよ」

「そんなことはっ…！」

「魔法を使える相手に限るけど、それでも戦わずに相手の力量がわかるなんてとんでもない才能だ。誇っていい」

そう、これはある意味反則だ。

なんせ魔法戦で勝てる相手と勝てない相手がおおよそわかるのだから。

勝てる勝負を選べるなんて普通じゃありえない。

「…良かった。私だけ視えてるのかと思って…ホントに不安で…ずっと怖かったです」

「そっか。普通はそっだよな。けどこれからはもう大丈夫だよな？」

「はい！昔、ある事件の後に急に視えるようになって怖くて…だけど、今日からは安心できます！」

「………！！…あ、ああ。それはよかった」

「ありがとうございます！」

今日初めてのラビリアの笑顔がそこにはあった。

が、俺はそのことに気づかず、ただただラビリアが言った台詞に意識の全てを集中していた。

『ある事件の後に急に視えるようになって』

……まさか。

あまりにもあり得ない偶然に声を出しそうになる。

ラビリアのこの経験が俺と同じだったからだ。

俺も最初から視えていたわけじゃない。

ラビリアと同じく、『ある事件』の後に視えるようになった。

それがラビリアと同じことを指しているかはわからないが、決して可能性は低くないだろう。

もう10年も前におきた、そして今も俺を縛り付けている過去。

今までただの一人も俺以外の生存者がいるということすら聞いたことがなかったんだが…。

ここにきて可能性のある存在が現れるとは…。

予期せぬ出会いに鼓動が高まる。

今すぐ確認したい衝動に駆られ、ラビリアに詰め寄ろうとした時、ようやくラビリアの花の様な笑顔に気づいた。

長年の不安がなくなり、心からの笑顔だとすぐにわかった。

この笑顔を曇らせるのは本意ではないから、無理やり自分を抑制する。

「それより、このことはあの二人には内緒にしてくれよ?」

「え?なんでですか?」

嬉しさのせいか、いつも以上に流暢に話すラビリア。

「まあ俺にもいろいろ事情がな。だからあたかも弱い風を装っていたんだ」

「わかりました…。約束します！」

「ああ、ありがとう」

ポンつと頭に手を乗せると嬉しそうにしてくれる。

さつき、自分を抑えられて良かった。

誰であれ過去に触れられるということは、少なからず悪い事柄をその人に思い出させてしまうものだ。

それは俺が一番よく知っている。

この子には、なんとなくだが悲しい思いはしてほしくなかった。

「さあ、そろそろつくぞ！」

ラビリアの件は落ち着いてからにしよう。

そう決めて、後ろで談笑している2人にも聞こえるように言うと、俺たちに並ぶように小走りでごっちに来た。

「意外と遠かったわね」

とミリーが呟き、皆でどれが宿だと言わんばかりに周りを見回している。

「あれだ」

と俺が一つの宿を指さし、一斉に視線がそこに向けられる。

少し小さめだが、きれいで洒落た外装の宿だ。

俺はその宿のドアを開き、すこし演技っぽく口にする。

「ようこそ。旅人の宿り木へ！」

## #2 偶然重なる過去（後書き）

戦闘は次回からになる予定です。

### #3 それぞれの前夜（前書き）

閲覧ありがとうございます。

前回後書きで戦闘は次回からと書いたのにもかかわらず、

今回も戦闘までいきませんでした。

次回は必ず戦闘までいきます。

### #3 それぞれの前夜

「ようこそ。旅人の宿り木へ！」

そう言い、三人を中へ入るよう促す。

外は暗くなり始め、街灯が灯り始めていた。

ここは宿だが、俺がオルガルドに来て以来ずっと世話になってるの  
で、今では自分の家の様な感覚だ。

「へえーお洒落なところね」

「ええ。外装も素敵でしたし」

「今までの宿で一番きれいです…」

三人が高評価をする。

確かに、ここは他の宿に比べると清潔感があり、外装も内装もお洒  
落だ。

普通宿というとただただ広いスペースがあり、より多くの客を入れ  
ようとする。

そして内装などにはお金は使わず、作られた当時のままで経営する。  
そうすると小汚い宿になってしまうのは自明の理だがそれでいいの  
だ。

なぜなら、宿のほとんどの利用客は俺のような旅人で、その旅人の  
ほとんどが男だから。

女の旅人もいるが、その絶対数は男に遥かに及ばない。

よって、男を対象にした宿が多く存在し、そのどれもが清潔感は一  
の次としているということだ。

なのでこの「旅人の宿り木」のような宿はとても珍しい。

ここは一見小さいし場所も良くないから儲かってなさそうだが、女の旅人のなかではオルガルドの宿と言ったらここ、と言われるぐらいに有名であり、意外と儲かっている。実際俺も数年ここを利用してはいるが、その間に利用していった客のほとんどが女性だった。

「ただいまー」

と、自分で言っておいて、俺も随分ここを気に入ってるなと思う。

「グランおかえり！今回は長かった…ね？」

カウンターにいた女性が満面の笑みで振り向き俺の言葉に答えるが、どうにも歯切れが悪い。

いつもと違う様子に俺も少し戸惑う。

「おうただいま、ってユーリ？どうしたんだ？」

「ど…どどどどどー！」

「どっ…」

三人も？マークを頭に浮かべてる。

どうしたの？といった顔でミリーがこっちをみってくるが、俺だっかわからない。

「よくわからんが、この女性はユーリ。この宿のオーナーの娘で、普段は接客をしてる。ちなみに俺より一つ年上だ」

「ユーリさん始めまして。グランに紹介してもらって来ました。ミ

リエール・マックギルといいます」

ユーリに続いてシアとラビリアも簡単な自己紹介を済ませる。世話になるうとしてしている宿だからか、皆一様に丁寧な話し口調だ。

「あら、ご丁寧ありがとうございます。私はユーリ・カースナー。せまい宿だけどゆっくりしていつてね！って違う！！！」

「何も違くないだろう？」

普段のユーリを知ってる俺は驚きはしないが、三人はユーリのテンションに驚いているようだ。

ユーリは感情表現豊かで、見ていてとても面白い。親父さんとは正反対の性格だ。

「ちょっとグラン！こっちきて！」

鬼の形相で睨まれ、頷かざるを得ない。なんでそんなに怒ってるんだよ…。

「なんだ？」

「なんだ？じゃないわよ！あの子たちは誰！？どついう関係！？もしかして三人ともこ…こここいびとなの！？」

矢継ぎ早に疑問を飛ばしてくるので、答える暇がない。

その間にもどんだん明後日の方向に話が膨らんでいき、そろそろ止めないとまずい気がする。

「三人なんて不潔よ！せめて一人にしなさいよ！あの子たちはだめ

「だけど！けど私ならべつに」

「落ち着け」

「口でなんとと言っても止まらないのは今までの経験から熟知している  
ので、

「ユーリの頭にチョップをする。」

「いったあ！なにをするの！？」

「お前があることないこと言うからだ。少し落ち着けて」

「落ち着けてあんだね！三人も女の子連れ込んで何言ってる  
のよー！」

「別に連れ込んだわけじゃない。人聞きが悪いことを言うなって」

「じゃああなたによ！納得のいく説明をしないと怒るわよ！」

「既に怒っているのは誰がみても明らかだが、そんな火に油を注ぐよ  
うなことをいう人はこの中にはいなかった。」

「最初から説明する気でいたので、用意していた言葉を並べる。」

「この三人と武闘会に出ることにした。それで宿がないっていうも  
んだからここを紹介した。それだけだ」

「…三人ともホントなの？」

「そ、その通りですわ」

一連の流れを見ていて、呆気にとられていた三人の中でいち早くシアが正気に戻り返事をした。  
さすが貴族の娘、といったあたりだろう。

「ふ、ふーん。まあなんとなくわかってたけど」

と、恥ずかしいところを見られたせいかわかるとか精一杯の強がりを見せるユーリだが誰もその言葉を信じていない。

「と、とにかくあなたたちの部屋に案内するわね」

こっちよ、と三人を先導するユーリ。

俺はいつもと同じ部屋を使うべく反対側に向かう。

「明日はよろしくね、グラン」

別れ際にミリーにそう言われ、苦笑して返事をする

「なんにもしないけどな」

おやすみ、最後にそう続けて俺たちは別れた。

「明日はついに私たちの実力を試せるわね」

私は緊張と、そして初めての武闘会にすこし興奮していた。今までは町役場のフリークエストを受けていただけだったから、自分たちの実力がどの程度なのかよくわかってはいない。それでも、シアもラビリアも、自分で言うのもあれだけど私もそれなりにいい線にはいける気がする。それはシアも同じらしく、私と同じく少しテンションが高い。

「そうですね。優勝はできなくても上位にはいきたいですわ」

そう、私たちは別に優勝賞品が欲しいというわけじゃない。

女だから弱い、という謝った常識を覆しただけなのだ。

もともと私はそんな大ざっぱな理由で旅にでたし、以前シアも似たような理由だと言っていたのを覚えている。

ただ、ラビリアの旅の理由は知らないけど…。

そういえばラビリアは今日は機嫌がいらしい。

いつもは少しおどおどしていて、私たちという時でさえあまり笑わないのだ。

そんな彼女が今ニコニコしているのを見れば、誰だって機嫌が良いということはわかると思う。

「ラビリアとっても嬉しそうだけど何か良いことあったの？」

その言葉を聞いた途端に、ラビリアはボツと顔を真っ赤にした。

軽い気持ちで言った言葉だったが、思わぬ反応が見れて少しからかいたくなる。

「なにになに？お姉さんに言ってるらん？」

「う…あの…／＼／」

「ミリーさん。あまりからかつのもかわいそうですね」

シアはそう言った割に、少し意地悪い顔をしている。  
この子、ときどきさっぼくなるのよね。

「でも、わたくしも気になりますわ」

「べ、べつになにもなかったです…」

誰も騙せないような嘘をいつてるラビリアがとてもかわいい。  
妹がいたらこんな感じなのかな？

「そんなことないでしょ？」

「そうですね、なにがあったんですの？」

二人で追い打ちをかける。

が、そろそろやめようかと思いきやシアに目配せすると、同じことを考  
えていたのか頷いていた。

しかし、次にラビリアが蚊の鳴くような声で言った台詞に私たちは  
驚いた。

「グラントさんの約束なので…言えないです…／＼／」

すごく恥ずかしそうに、それでも決して嫌そうではなく、むしろ嬉  
しそうにそう呟く。

「「……」」

私たちは顔を見合わせ、次にラビリアを再度見る。

あの人見知りで恥ずかしがり屋で男性が苦手なラビリアが、男の名前を嬉しそうに呟いたのだ。

それはもう、ここ最近で一番の驚きである。なにがあつたか、ものすごく気になる。

「えーと、教えてはもらえないの？」

「はい…。ごめんなさい…」

「いいのいいの！約束してるならしょうがないわ」

「そうですわね」

それにしても。

グラント・カツシュかあ。

よくわからない男だ。

わかっていることと言えば、年齢とめんどくさがりということと、秘密がやたらと多いことくらいしかない。

ただ悪い奴ではなさそうだけど。

女三人で武闘会にでるって言った時も特に馬鹿にした様子もなかった。

そして三人でいるとよくあることだが、彼からいやらしい目で見られることもなかった。

良い奴なんだろうけど、なんか掴み所がないというか…なんというか…。

「グラン様は一体何者なんでしょう？」

シアも疑問に思ったらしく、私たちに聞いてくる。

ただ、その問いに答えられる人物はこの場にはいない。

「さあ？なんか、結局ほとんど謎のままね」

「確かにそうですわ。悪い人ではなさそうでしたけど」

「うん。強いのか弱いのかもわかんないし」

ホントに謎だ。

ラビリアは異様に気に入ってるようだけど、  
もしかして。

「もしかして、惚れちゃったの？」

「…／／／」

無言で照れるラビリア。

それが全てを肯定していた。

「なんかグランのことがとっても気になってきた」

「わたくしもですわ」

ラビリアにここまで気に入られるなんて、にわかには信じられないけど。

私の中の純粋な好奇心が、グランのことを知りたいといっているよ  
うな気がした。

「武闘会が終わったら聞いてみましょうか」

「そうですね」

まずは武闘会。

ここでいい成績を残して、そしてそのあとにグランの事を聞く。それが、いつの間にか私とシアの目標になっていた。

部屋に行き荷物を簡単に片づけた俺は、久々に帰ってきたことを報告するために厨房に行った。

そこには忙しく調理をしている、ユーリの父親ガートがいた。

「おじさん久しぶり。またやっかいになるよ」

「おう。怪我はなかったか？」

「大丈夫だ。おじさんこそもう結構年だろ？」

「俺はいつまでも健康だ」

それだけ言葉を交わし、厨房をあとにした。調理の邪魔はしたくないし、おじさんもあまりしゃべる方ではないのだ。

今日は帰ったばかりだし、久々にゆっくり寝るのもいいと思ってさっそく部屋に行ったが、部屋の前でユーリが待っていた。

「どうした？こんなところで」

「あの子たちにはどこまで話したの？」

先ほどのテンションが嘘のような、真剣な眼差しでこちらを見てくる。

「まだなにも。もともと気軽に話すことでもないしな」

「そう…」

「もし仮に話すことになっても、お前を忘れるわけじゃあないから安心しろ」

「別にそんなこと心配してるわけじゃっ！」

「わかってる。冗談だ」

「…何にもわかってないくせに」

ユーリとおじさんは俺の恩人だ。

俺の中でこの二人のことは何よりも優先度が高い。

ぼろ雑巾みたいな子供だった俺を、全然心を開かなかった俺を根気よく世話してくれた。

いくら感謝してもきれない恩が二人にはある。

「で、今回は何か収穫はあった？」

「ああ、旅ではいつも通り何もなかったな」

「そっか。って旅ではって他では何かあったの？」

「ああ、『赤い夜』の生存者かもしれないやつがいた。俺以外にな」

「……！！まさか、あの三人の誰かなの？」

「ラビリアっていただろ？あの子だ。まあちゃんと聞いたわけじゃないから確証はないが」

「なんで聞かなかったのよ！」

「あの夜のことを思い出させるには状況が悪かった。それに何かトラウマがあってもおかしくないだろう？」

「あ、そっか……。そうだよな。ごめん」

「……昔からお前はいつも俺の心配をしてくれるな。本当に感謝してる」

「そんなこと……ないよ……」

「照れるな照れるな。うるさい方がお前らしいぞ」

「ちょっとどどっという意味！？」

落ち込んだユーリは見たくない。

そんな我がままを通すためにいつも俺はからかうようなことを言うてしまう。

それを少し申し訳なく思うと同時に、そんなことができる相手がいるということを楽しそうに思う。

願わくば、彼女だけでもいつまでもこんな日が続くように。

「さて、今日はいろいろあって疲れたんだ。俺はもう寝るよ」

「そう…ね。またお土産話聞かせてね？」

「おう。おやすみ」

「おやすみ。明日は頑張ってるね」

挨拶を交わし、ようやく部屋に入る。

（頑張ってるって言われても…。戦わないし）

どう頑張ればいいのか？

説明してからも、ユーリはどこか俺が戦うことを前提にしてるみたいだったしな。

そんなはずはないのに…。ないよな？

（あるぞ主よ。武闘会に出てるのに戦わない理由なんぞなかるう）

今日、何度も話しかけてくる精霊に嘆息してかえす。

（お前も聞いてただろ？俺は戦わなくていいって約束でるんだってこと）

（それは聞いていた。しかし、あの小娘たちだけでは優勝はできんぞ？）

（別にそれでいいんだろ。何が何でも勝ちたいってわけじゃなさそうだし）

(わしが良くない。主がいながら負けるなんてのは許せん)

(お前は俺を過大評価しすぎだよ)

(何をぬかすかと思えば。この火の精霊にして王女と呼ばれたわしが人の子に使役されてる事実を知れば誰だって主の強さを認めるだろう)

(人間はそんなに物分かりの良いやつばっかじゃないぞ)

(なににせよ負けるのは許さん。主がまじめにやらないならわしが無理やり出てやるぞ)

そんなことしたら会場がたちまちパニックになるんじゃないか？  
まあ案外大丈夫だろうけど、確実に注目を浴びることになるな…。  
しかしやるといったらやるのがこいつだ。

王女と呼ばれていたただけあって、強さと我がままさを兼ね備えている。

(はあ…。わかったよ。負けそうになったらなんとかするから無理やりするのはやめてくれ)

(それでよい。しかし主よ、戦うことになったらわしを出すと約束したことは忘れておらんか?)

…忘れてた。

どっちにしろこいつを出さなきゃいけないのか。

あの時はまさかこんな状況になるなんて思わなかったからな。

今後迂闊に約束するのはやめよう。

(明日が楽しみじゃ)

(頼むから。やりすぎるのはやめてくれよ…)

俺はそう願うしかなかった。

#### # 4 武闘会、開幕（前書き）

閲覧ありがとうございます。

#### #4 武闘会、開幕

遠い日の記憶。

まるで蠟燭の火を吹き消すかのように簡単に、人が命が次々に消えていく光景。

血で出来た水たまりに月夜が映って出来た景色に、目を奪われたのを覚えている。

あの日の夜は、赤かった。

「……またか」

寝れば必ず同じ夢を見る。

そして起きた時には不快な汗をかいている。

それが俺の日常だ。

もうずいぶん前から続いていて、さすがになれた部分があるが、憂鬱になるのは避けれない。

俺は朝も夜も嫌いだ。

唯一日の出てる時間だけが、俺にとって本当の意味で休める時間。空が青い時間だけ、心に余裕が生まれる。

「…シャワー浴びるか」

宿の風呂は俺の部屋から外にでて、少し歩いたところにある。

今は早朝だから、誰とも会わないだろうと服を脱ぎ捨て、廊下で  
る。

「あ、グランおは……」

「あ……」

少し歩いたら、既に寝まきから着替えたらしいミリーとばったり会  
ってしまった。

下着は履いてるとはいえ、これはもしかしたらまずいんじゃないか？

「おはようミリー、とりあえず落ち着い」

「きゃー……!」

で、と言う前にミリーの悲鳴が宿中に響き渡った。

「めんどろな事になったな……」

この後、駆けつけてきたユーリに説教をくらい、ようやく風呂に入  
れたのは30分後のことだった。

「まったく、グランの神経はどうなってるわけ!？」

せっかくだからと朝食はみんなで囲むことになり、長テーブルに全  
員が座っている。

全員と言っても、昨日はたまたま俺たちが来るまで客がいなかった

らしいので見知らぬ人はいない。

席順は、ユーリ、俺、ラビリアで向かい側にシア、ミリーとなっている。

宿の料理はおじさんが作っていて、そのどれもが絶品なのだが今日は味がよくわからない。

といっても、料理がまずいのではない。証拠にラビリア、シアの2人はバクバクと口に運んでいる。

ただ、ユーリとミリーから非難の視線を浴びせられながらの食事なので、集中できないのだ。

「ミリー、謝ったんだからそろそろ許してくれないか？」

「いやよー！」

どうすりゃいいんだ？

「なんで女性客の多い宿で裸で歩くのかなあ？」

「下着は履いてたから裸じゃないんだが」

「へりくつは言わない」

なんでかユーリも怒っていて、俺は途方に暮れる。

しかし、時間も進むにつれて2人も気が晴れてきたのか、俺への愚痴が少なくなってきた。

その隙を見逃さず、すかさず話題の変更を試みる。

「それにしても、ミリーは朝早いんだな」

と聞いてみると、その理由はなぜかシアから明かされた。

「ミリーは毎朝素振りをしているんです」

「へえ、偉いな」

「べ、べつに偉いとかじゃないわよ。単に習慣だっただけで」

薄々気づいていたが、どうも素直じゃないらしい。

しかし、習慣で素振りをするってことはやはり剣術メインなんだな。

「習慣でも偉いさ。剣術は積み重ねが力になるからな」

そうは言ったが、剣術に限った話でもない。

結局、戦いの世界では努力が物を言う。

俗に言う天才というやつも努力を怠れば、天才じゃなくても努力を重ねてきたやつには勝てない。

「そ、そういうグランも朝早いじゃない？」

褒められるのが苦手なのか、まるで誤魔化すように聞いてくる。

俺は早起きしてるんじゃないかって、起きてしまっただけなんだが、まさか理由を正直に言えるわけもなく適当に濁す。

「まあな。俺も習慣みたいなもんだ」

習慣。

確かに言い得て妙かもしれないな。

「……………」

そう言った俺の隣で、理由を知っているユーリが俯く。

「ユーリ、お前が気にすることじゃないさ」

「うん…」

俺とユーリの会話がわからない3人は気になるのかこっちを見ている。

詮索されたくないの、再度話題を変える。

「ところで、今日は俺戦わなくてもいいんだよね？」

「え、ええそうですね」

「3人で大丈夫よ」

急な話題展開に困惑しながらも、ちゃんと返事してくれるのが嬉しい。

「目標は？」

「特に決めてないわ。実力を試したいの」

「なるほどね」

こいつらなら3人というハンデがあってもいいところまで行けるだろう。

「じゃあ俺がお前たちの実力の証明者になってやろう」

「ええ、ちゃんと見ておいて」

ミリーも自信があるのか、堂々と言い張る。

「そんじゃそろそろ行くか？」

そう言つて俺が立ち上がると、3人も続いた。  
いよいよ武闘会の始まりだ。

武闘会の会場に行くと、既に歩くのも困難なくらいの人がいた。  
どこを向いても人。

参加者もいれば、観戦者もいる。  
参加者は広大な面積を有する控室に、観戦者は何万人も座れる観客  
席に移動する途中だろう。  
そしてタイミングがよかつたのか、次の試合は俺らの一つ前の組の  
ようだ。

「意外と時間がギリギリだったみたいね」

「間に合つてよかつたです…」

もし間に合わなくて棄権などになっていたら笑えなかつただろう。

「緊張するなよ？」

「わかっていますわ」

一応その声はかけたが、ホントに緊張している様子はない。これなら1回戦は大丈夫だろう。

「あ、終わったみたいですよ…」

ラビリアの言う通り、最後の一人が組伏せられて試合が決した。

「じゃあ行きましょ」

そういつて、ミリーを先頭に控室から登場口まで移動する。

その移動の間は、3人が女ということもあって異様に視線を感じた。中には馬鹿にするようなことを言っている参加者もいる。

が、そんなことを気にする様子もなく、試合のことだけに集中している様子を見ると、

戦わない俺も安心できた。

程なくして、アナウンスが流れる。

「次の試合は代表者トードスのチームと代表者グラントのチームだ！！中央まで来てくれえ！」

初日からテンションMAXのアナウンスに若干引きながら歩を進める。

この試合会場は中央まで行くと、無意味じゃないかと思うくらい広さがあった。

「おつとお！？グラントチームは3人も女の子がいるぞー！！！」

そう言うと、会場がざわめいた。

まあ今まで男ばかりだったろうから当然かもしれない。

ここで、俺は相手を観察する。  
筋肉質の男4人組。魔力は視えないので使えないのだろう。  
剣を所持しているが、掌には剣士独特のまめなどが見えないので素人だろう。

「こいつら、素人だな」

そうミリーに言う気づいてたのか頷き返された。  
こんなやつら相手なら勝負にもならないだろう。

「先に言っておくが、俺は攻撃しないから」

そう相手に告げると、表情が引きつった。

おそらく、なめられていると勘違いしているのだろう。  
約束したからなんだが、なめているというのもあながち間違いでもないか。

「なんとなんと！唯一の男性であるグラント選手は攻撃しないと相手に宣言したあ！！これは挑発かあ！？」

アナウンスを聞いて、さらに怒りの表情になる相手。  
完全に火に油を注いでいる。

「早くもトーダスチームが戦闘態勢みたいなのでそろそろいくぜえー！！レディーファイ！！」

アナウンスが試合開始を宣言する。

それと同時に相手チームがこちらに突っ込んできた。  
それを冷静に確認すると、シアが炎の遠距離魔法を男たちの手前に着弾させ、砂埃をたたせる。

視界が悪くなった男たちは速度をおとし、緩慢な動きになった。その隙を見逃さず、ミリーが一番近くにいた男に向け走り出す。そして一対一の形になる。

視界が悪いため、他の男たちはそんな状況になっていることに気づいてはいない。

ミリーは剣を抜かず、逆に剣を抜いて縦に斬りかかってきたのを横に軽く避けると、

がら空きになった横腹に蹴りをいれる。

蹴られた男は低い呻き声をあげて気絶した。

残り3人となったところでようやく砂埃がはれ、相手はそれぞれの状況を確認することができたが、戦況は既に王手がかかっていた。

「なっ！」

相手の代表者が思わず声をあげる。

それも仕方がないのかもしれない。

なんせ気づいたら一人が倒れていて、自分以外の2人は魔法で拘束されていたのだから。

シアとラビリアは、砂埃が少しはれてきて、相手の姿がうつすらと視えた時に、

拘束魔法で相手の身動きを封じていた。

本来なら拘束魔法は、犯罪者などを捉えるために使う魔法であり、使えば自分も動けなくなるという条件があるため戦闘向けではない。だが今回の彼女たちの作戦は、ミリーと相手の1対1を作るといったものだった。

それゆえ、真つ先に一人を潰し、3対3の状況を作り上げることを優先した。

先ほどと同じく、ミリーは相手から斬りかかってきたのを今度はバックステップで避けると、

剣を抜かずに鞘のまま、相手の振り下ろされた剣を握っている右手の甲に叩きつけた。激痛により剣を離れた相手に、今しがた相手が落とした剣を拾って軽く投げる。

それを反射的にキャッチしようとして、両腕が上がった状態の男のから空きな腹に、先ほどと同じく蹴りをいれる。

ガードできるわけもなく、崩れ落ちる敵の代表者。

おそらく、一番強かったのだろう。

それを見ていた、というより見ているしかなかった仲間、剣を地面に投げ捨てた。

つまりは、降参したのだった。

「開始僅か5分足らずで勝敗が決したようだあ！！勝者はグラントチーム！！！」

観客席は、予想外の女の子たちの活躍により、今日一番の盛り上がりを見せていた。

## #5 それぞれの実力（前書き）

閲覧ありがとうございます。

## #5 それぞれの実力

一回戦を終え、次の試合までは時間があると運営委員に言われた俺たちは一度宿に戻ることにした。

その道中、ミリーたちは反省会を開いていた。

「あの程度だったらシアとラビリアの遠距離魔法だけで倒せたんじゃない？」

「そうですね…。威力が高い魔法を選べば確かにそれだけで勝てたでしょうけど…」

「その分発動までに時間がかかるので、もしかしたら相手が先に私たちの方に辿りついてたかもしれないです…」

ミリーたちの会話通り、戦闘に魔法を用いるのは今や常識と言っても過言じゃない。

しかし、魔法の力を過信しては逆に戦闘での勝率を下げるだけだ。その点を考えれば、先の彼女たちの戦闘での魔法の使い方は正しかったと言えるだろう。

また、魔法については未知の部分がまだまだ多い。

そもそも魔力とは何なのか、ということすらも謎だ。

そんな魔法だが、性質はすこしだけ解明されてきている。

まず、個人の魔力量には限りがあること。

自分の保有魔力が底をつけば、当然自力では魔法は使えなくなる。

第2に、魔力は早いペースで回復するということ。

例えば保有魔力が底をついても、個人差はあるがおよそ10分もあれば回復するほどだ。

第3、個人により得手不得手があるということ。

魔力があれば誰でも魔法が使えるわけじゃなく、使えたとしても火系統が得意だったり、水系統だけ使えなかったりと様々なケースがある。

無論、なんでも使えるというケースもあるだろう。

第4、魔法にもレベルがあるということ。

明確に区別されているわけではないが、先の戦いでシアが放った遠距離魔法とラビリアが使った拘束魔法は両方とも下位に属する魔法で、そういった魔法は無拳動かつ無詠唱で使うことができる。

その反面、威力は期待できないので、主に誘導や時間稼ぎなどに使われる。

上位に属する魔法は、威力は段違いに高く、他にも下位にはない効果があったりと戦況を左右できるものだが、その分拳動や詠唱を行わなければうまく発動できない。

それでも魔法に長けたものならば詠唱などしなくても発動できるんだが、まあそれはいいか。

おそらくまだあるのだろうが、実践で強く関係があるのはこの4つくらいだろう。

魔法が使えるからといって慢心していると、ただ使えるだけ魔法を生かせることは決してできない。

剣術、武術と同じで、魔法も努力することで上達し、より高みへ近づけると俺は信じている。

「ところで、グランは私たちの試合を見てどう思った？」

「まあ、よかったんじゃないか？」

聞かれると思っていたので、用意していた言葉をそのまま言った。が、具体性のない俺の感想を聞いて、ミリーは少しムツとしたようだ。

「それだけ？他にはなんかないの？」

俺が見たところ、彼女たちの戦略に何か大きな穴があったわけでもないし、

実力も特に悪くはないので言うことはないんだが、これは何か言っとかないといけない雰囲気になっている。

「そうだな。まあ強いて言うなら、考え方が少しあまいかもな」

「それは戦略があまいってことですか？」

「いや、戦略をたてるまでの過程の話だ」

「…えっと？よくわかりません…」

ラビリアと同じく、ミリーもシアも何が言いたいのかわからないらしく、俺の言葉を待っている。

「まず聞きたいんだが、なぜあの戦略にしたんだ？他にも選択肢はあっただろ？」

「そうね。まず相手が全員帯剣していたし、筋肉質だったから接近戦になるだろうと思って目くらましを選んだわ」

「ええ。それで動き回る相手に魔法で戦うよりも、動きを制限させてミリーの得意な接近戦に持ち込んだ方がいいと思っただんですわ」

「なるほど」

概ね予想通りだな。

「あの…それでどこがいけなかったんでしょうか？」

「いや、結果として戦略は悪くなかった。むしろ正攻法で良かっただろう」

「えっと、じゃあ…？」

「ただそれが、たまたま前提が合ってたからだということをやんと理解してるかどうかが問題なんだ」

「????？」

3人とも俺が何を言ってるか、何を言いたいのかがわからないようだ。

「帯剣していて筋肉質だったから接近戦を仕掛けてくるだろうと考えるのは良い。俺だって最初はそう考える。だが、それは予想に過ぎないということを忘れてなかったか？必ず相手は接近戦を仕掛けてくるだろうと勝手に確信して戦略をたてなかったか？」

「っ！！」

思い当たるのか、3人が息を飲むのがわかった。

「相手が魔法を使ってくる可能性を、飛び道具を隠し持っている可能性をちゃんと予想していたか？もし予想していたら、目くらましなんて手段は選ばなかったはずだ。なんせ相手が遠距離攻撃を使えば、今頃その目くらましで自分たちが苦戦していたかもしれないんだからな」

「……………」

「初戦だからそこまで考える必要はなかったかもしれない。けど、強くなりたいたいなら本当の実践を常に意識することが大事だ。実践では自分が死ぬかもしれない。あらゆる可能性を考慮した上で戦略を練ることが、勝つために、何より生きるために必要なことなんだ。」

生きるために必要だということ。

これが、彼女たちに一番覚えていて欲しいことだった。

「…悔しいけど、グランの言う通りだね。そんなこと思いつきもしなかった…」

「わたくしもですわ…」

「わたしもです…」

意識しておいて欲しくて言ったのは確かだけど、3人もまるで試合に負けたかのような雰囲気になってしまった。

今はそこまで考えることでも、ましてやすぐに実行できることでもないのでそんな気にされると逆に困ってしまう。

そんな雰囲気を払拭するために、俺は努めて明るく声を出す。

「ま、まあまあ！今は勝ったことを喜ぼう！今のアドバイスなら次から気にしてくれればいいから！」

「…そうね。次はもう迂闊な戦略はとらないわ！」

別に迂闊ってほどでもなかったが、元気は出たみたいで安心する。

と、そこでシアからの予想外の質問が俺を再度不安にさせる。

「ところでグラン様は素晴らしい慧眼の持ち主なんですね！」

「…確かに。なんかグランって強くなそうな雰囲気だったのに意外ね」

…しまった。

気になったことをべらべら話しすぎたみたいだ。

シアがなんかものすごい期待するような目でこっちを見ているし、ミリーまでも関心したように言う。

こいつらには実力がばれてもいいかとは思っていたが、今ばれると稽古に付き合えとか言われそうだからな。

唯一俺の実力を軽く知っているラビリアはどうしていいかわからずおどおどしている。

「た、単に傍で試合を見て気づいただけだな、ラビリア？」

「そそそそつですよ！」

「なんでラビリアさんに確認するんですの？」

しまった！焦ってついラビリアにふってしまった。

そのせいでシアもミリーもなにか疑う目で見ているが、先のアドバイスのこともあってあまり詮索しないでくれるようだ。

「よくわかんないけど、まあいいわ。けどそっかー。残念だわ。せっかく稽古つけてもらおうかと思ったのにな」

稽古について案の定言われたので、やはり隠しておいて正解だった

とホツとする。

「強い奴なんてそこらへんにいっぱいいるさ。ほら、宿についたぞ」  
適当なことを言っただけの話で強引に終わらす。  
次の試合まで俺たちは羽を伸ばすのだった。

武闘会が始まってから3日目になり、俺たちはまもなく始まる予定の4試合目を待っていた。

初日であった2試合目、2日目であった3試合目は結果からいって快勝だった。

戦略の練り方も初戦に比べて隙のないものだったし、試合内容も申し分なかった。

「それじゃあ次の試合を始めるぜえー！！グラントチームとウォルソントームカモオオーン！！！」

相変わらずテンションが高いアナウンスが響き、同時に大音量の歓声が会場に溢れた。

この3日間で俺たちのチームは、3人の少女がいるチームとして有名になっていた。

ちなみに、戦わない代表者がいるということでも有名である。

戦おうと戦わまいと結局目立つことになるということに、なぜ気付かなかったのだろうか。

「初日から話題を集めまくっているグラントチームだあ！！代表のグラント選手は一体いつ戦うんだあー！？」

大きなお世話だ。

「その対戦相手は大都市オルガルドでも有数の貴族、グレン家の子息ウォルソン選手だあ！！」

ほう、貴族が対戦相手か。

相手を良く見ると、確かに質の良さそうな服装をしている。

「ウォルソン選手は貴族の間では「天才」と呼ばれている、今大会の注目株だ！！！」

「天才？」

ミリーかシアかラビリアか、はたまた3人かわからないが、そう眩しく声が聞こえた。

その天才と呼ばれたウォルソンとやらを見てみると、なるほど魔力は相当高いようだ。

その仲間の3人も魔力がそれなりにあり、全員が帯剣もしている。今までで一番厄介な相手のようだ。

「今回は頑張らないときついぞ？」

そういうとわかってる、というように頷く3人。

どうやらそれなりの相手だということとは理解しているらしい。

それを確認して、俺はウォルソンたちにもう恒例化してきている台詞を言った。

「先に言っておく。俺は攻撃しないから」

と言うと、待つてましたといわんばかりにアナウンスの音が響く。

「でましたあ！！！グラント選手の攻撃しない宣言だっ！！」

これまたアナウンスの声と同時に謎の歓声。  
これが相手の琴線に触れたらしい。

「おいお前、俺たちを相手にそんな舐めた態度していいのか？」

高圧的な態度で、まるで自分が全て正しいと言わんばかりの目をしている。

俺の嫌いな目だ。

「なんでそんなに自信があるのかわからないが、お前らにとっては相手が一人減るんだからいいだろ？」

「それが気にいらねえって言うてんだよ！！3人でも勝てるって言うたいのか！？」

「別にそんなつもりじゃないんだが…」

まあ、説明したところで何の意味もないか。

「それより早く始めようぜ」

そういい、俺は後ろに下がる。

それをアナウンスが見ていたのかどうかはわからないが、ちょうど

試合開始を告げた。

「それじゃあいくぜえ!!!レディイーターファイ!!!」

それと同時に、両チームの下位火魔法「バースト」がぶつかる。

こちらはラビリアだけが放ったのに対し、向こうは2人が放っていた。

相殺しきれなかったバーストが向かってくるが、既に速度も遅くなっていたので3人はそれをなんなくかわす。

その間にもミリーは、投げナイフで牽制し距離を保っている。

さすがに今回は相手の体格、体さばきなどを見て接近戦では不利になると考えたらしい。

そしてようやく、シアが試合開始から詠唱を始めていた魔法が完成した。

上位水魔法「アクアストーム」。

水を大量に生み出し、それらを相手の方向にさながら津波のように向かわせる、攻撃に特化した魔法。

一気に試合を決めるといふ意志がそこにはあった。

言いかえれば、実力の差がはつきりあると認めたせいで、このような奇襲紛いの戦略しかできなかつたということだ。

しかし、余裕の表情を見せていた相手チームだったが、ここにきて始めて焦りを感じている。

全員魔法が使えるだけあって、「アクアストーム」の威力が絶大なのは知っているらしい。

相手全員が近くにまとまると同時に、シアが魔法を発動させた。

勢いよく進む水は、相手を飲み込んだかに思えた。

観客も、それにシアたちも自分の勝利を一瞬確信して、そしてその表情を驚愕に変えた。

視線の先には、相変わらず高圧的な顔のウォルソンがいたからだ。

「うそ…」

「あ、あれを防ぐんですの？」

ミリーが呟き、シアも呆然とする。

おそらく自分の持てる魔力を一気に使ったんだろう。

それ故に、防がれたシヨックが大きかった

しかし、あれほどの上位魔法を防ぐとなるとおそらく

「合成魔法…？」

ラビリアは確証が持てないみたいだが、あれは紛れもなく合成魔法だ。

すなわち、他人との魔法の合体。

これは1人1人が同じ魔法を同じ魔力量、同じタイミングで発動しないとできないもので、打ち合わせ程度でできる技ではない。

チームワークが良く、それなりに実力が伴っている証拠だろう。

「さつきはさすがに少し危なかった。まさか合成魔法「蒼壁」を使わされるなんて思わなかったぞ？」

そう言いつつ、ニヤリといやらしい笑みを浮かべるウォルソン。

こちらの状態に気づいたらしい。

「まさかさつきのでおしまいか？」

「くっ…！」

「おいおいおいおい！舐めた態度しておいてこれだけか！？これだけだったら棄権でもして「おままごと」でもしてた方がよかったん

「じゃないか！ああ！？」

おままごと、をやけに強調して観客にまで聞こえる声で叫ぶ。仲間もウォルソンにつられて笑いだした。

「実力を試したい、と言っていたミリーは悔しそうに睨み返すことしかできなかった。」

「じゃあ茶番を終わらせようか！俺たちは優勝しなきゃなんないから忙しいんだよ！！！」

そういうと、また合成魔法を発動させるべく魔力を練り始めた。だんだん出来あがっていく強大で凶悪な魔力の塊に、3人は恐怖を感じ、抑えのきかない震えに体を預けていた。

「じゃあな！次はせいぜい頑張れよ？」

そう言い捨て放ってきたそれは、明らかに怪我じゃ済まないほどの魔力を帯びていた。

それは誰の目からも明白であり、相手チームも観客も、ミリー、シア、ラビリアの最悪な結果を想像した。

俺以外は。

ドゴオン！！と大きな爆発音とも衝撃音ともとれる音が会場に響き、砂埃が舞い上がる。

ウォルソンは勝利を確信した。

観客はその砂埃の中に少女たちの無残な姿があることを疑わなかったが、それを自分の目で確認せずにはいられなかった。誰もが食い入るように砂埃に目を向けているなか、だんだんと視界が良くなっていく。

そして観客たちよりも近くにいたウォルソンは、誰よりも早く砂埃の中に先ほどまでなかった姿を認めた。

一瞬で思考は勝利の余韻から、現実の認識へと移された。あり得ない、そんなはずはない、そう言った言葉が延々と脳内を廻る。

なぜならそれは、最初に生意気にも「攻撃しない」と宣言した、少し気だるそうな青年だったからだ。

「なぜお前がそこいるっ！！どうしてお前ら全員無事なんだっ！！」

驚きで全身を支配され、思わず叫んでいた。

少年は不敵な笑みを浮かべただけで何も答えない。

それを見たウォルソンは、思わず後ずさりしてしまう。

この時、自分が戦闘で初めて恐怖を感じていることに気づいてはいなかった。

「ついに！！ついに動いたグラント選手が絶体絶命の危機を救ったあ！！！！！！」

そうアナウンスが叫び、再び会場は歓声に溢れた。

「ついに！！ついに動いたグラント選手が絶体絶命の危機を救ったあ！！！！！！」

俺は置物か何かと勘違いされていたのだろうか？  
そう思わざるを得ないアナウンスだった。

「え？グラン…？…え？」

「わたくしたち…たすかったんですの？」

ミリーとシアは何が起こったのかわからないらしく、目を瞑ってしまっていたらしいからしょうがないが、呟くように言っている。  
ただラビアだけは何故か嬉しそうに近づいてきて、

「やっぱり強かったです…／／／」

と良い、見上げてきた。

それがなんだが小動物を連想させ、試合中にも関わらず頭を撫でてしまう。

が、それを見たウォルソンが先ほどに続いて疑問を次々に投げかけてきた。

「なぜ無事なんだっ！！」

「防いだからだ」

「どっやってっ！！」

「教えるわけないだろう？」

俺の適当な返答が頭に來たのか、まだなにか叫びそうだったのだが、仲間が何かウォルソンに言うことで、その表情は落ち着きを取り戻した。

「…まあいい。確かに驚いたが、それでも俺たちの勝利には変わらない」

「ほう、なんでだ？」

俺がそう聞き返すと、愉快でしょうがないといった顔をするウォルソン。

「お前、まさか最初に自分で攻撃しないと云ったこと忘れたなんて言わないよな？まさかこの大勢の観客の前で嘘つくのか？」

「俺は攻撃しない。約束したからな。ただ、勝つのは俺たちだ」

ニヤニヤと相変わらず嫌な笑みを浮かべるウォルソンにそう宣言するようと、

さすがに冗談を言ってるとは思わなかったようだ。

「攻撃しないのに勝つだと…？お前は何を言ってるんだ？」

純粹な疑問なんだろう。

先ほどの余裕の表情も、馬鹿にした表情も見られない。

また、俺が言ってる意味がわからないのは全員同じだというのがアウンズでわかった。

「攻撃しない宣言は未だ覆していないのに、グラント選手は一体どうやって勝つつもりなんだあ！？」

試合が始まってから、だいぶ時間が経ったな。それだけ確認すると、俺は魔力を練り上げる。イメージは門。

現実と幻想を繋げる門だ。

そのイメージが完成すると、現実でも変化が現れ始めた。

「な、なんだこれはっ！お前！何をしている！？」

俺の周りに半径1メートルくらいの円状の炎が現れた。

それにさらに魔力を込め、呼ぶ。

「出番だ。おいでフレア」

俺の呼びかけに応えるように、円状だった炎が空まで登った。

「きゃっ！」

今まで呆然と見ていただけだったミリも、急に増幅した炎に驚きの声をあげた。

やがて、炎は元の状態に戻るように減少していき、この場にいる全員の視線がもうすぐ現れるであろうグラントに集まった。

程なくしてグラントが姿を現したとともに、今日何度目かは分からないが、おそらく一番であろう驚きが一同を襲った。

「やっとわしの出番か。主よ、随分待たせてくれたな？」

そこには先ほどまでいなかった、燃えるような赤い髪を持つ少女が、グラントに寄り添うように立っていた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3704ba/>

---

赤い夜

2012年1月13日00時48分発行